

オオニジウヤホシテントウの食餌植物について

小 山 長 雄

バレイシヨの1大害虫として知られるオオニジウヤホシテントウ *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSHULSKY の食餌植物は、既往の記録と演者の観察及び実験の結果を総合すれば、15科52種の多きに達するが、其の中1定の基準に従つて整理を行えば、次の7科29種となすことが出来る。

科 目	種 名	観察頻数 (10名)	攝食 程度
キ ウ	1. ゴボウ	7	+
	2. カボチャ	10	++
	3. キウリ	10	++
	4. スイカ	2	+
	5. ヘチマ	2	+
ナ ス	6. ツクバネアサガオ	1	++
	7. タバコ	1	+
	8. チョウセンアサガオ	⑦	+++
	9. トウガラシ	8	+
	10. トマト	⑩	+++
	11. イヌホウズキ	⑥	+++
	12. ナス	⑩	+++
	13. バレイシヨ	⑩	+++
	14. ホウズキ	8	+
	15. セナンリホウズキ	4	-
	16. クコ	⑦	++

マ メ	17. インゲン	6	+
	18. ササゲ	8	+
	19. アズキ	7	+
	20. ダイズ	3	×
	21. エンドウ	3	+
	22. ソラマメ	6	+
	23. クロバー	1	+
ジウジバナ	24. ダイコン	1	+
	25. ハクサイ	7	++
	26. タイサイ	2	+
	27. ノザワナ	1	+
ア カ ザ	28. ホウレンソウ	1	+
ヤマノイモ	29. ナガイモ	3	×

備考：○幼虫、+僅かに食す、++かなり食す、+++好食、-未調査、×実験観察不良。

以上の中、被害の相当にあるものは、カボチャキウリ、ツクバネアサガオ、チョウセンアサガオ、トマト、イヌホウズキ、ナス、バレイシヨ、クコ、ハクサイの3科10種で実際にはこの中の栽培作物が本害虫防除の対照となる。

野生植物のイヌホウズキは種々の点から誘致植物の可能性がある。

尙、食餌植物の種類によつて成虫の食葉状態(喰痕)も幾分異ることが認められた。

(信州大学繊維学部生物学教室)

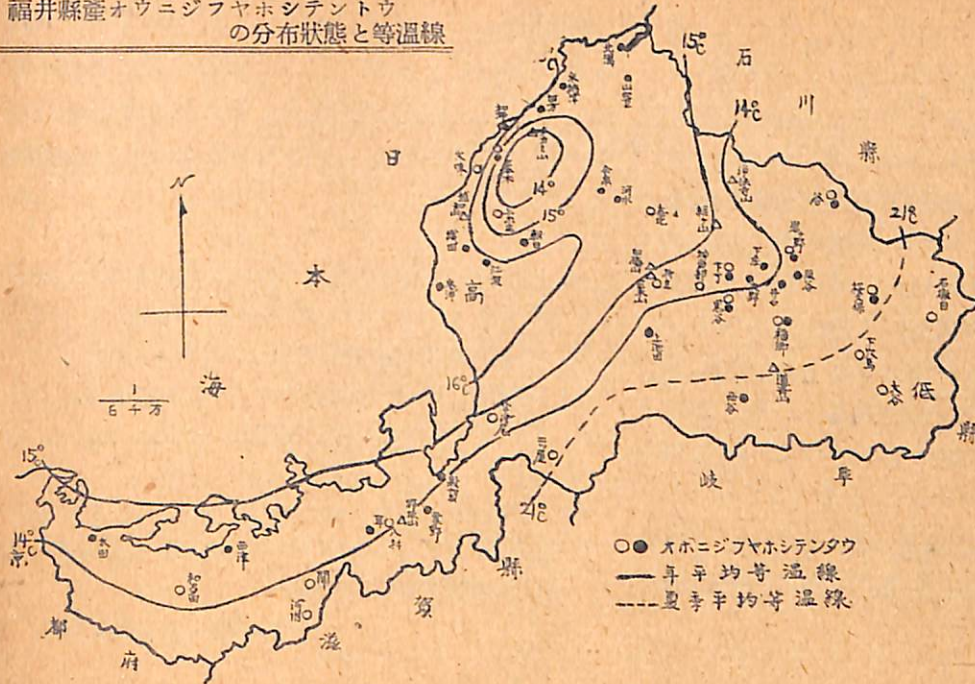
福井縣産オホニジウヤホシテントウの分布 (豫報)

友 永 富

北方系の害虫といわれるオホニジウヤホシテントウ *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSCH-

ULSKY) について、縣内の分布を調査した概要を報告したいと思う。

福井縣産オウニジウヤホシテントウの分布状態と等温線



この調査は昭和24年6月中旬から7月中旬にかけて、縣下の各町村農業協同組合や小、中学校に依頼して送付を受けた標本によつた。回答数は必ずしも多くはなかつたが、その結果と、前縣農試技師森野伊作氏の観察を加えると第1圖及び第1表のとおりである。

すなわち、本縣のオウニジウヤホシテントウの分布は、年平均気温（午前10時観測）の14°C以下の地帯に濃く、それより温度が高まるにつれてだんだん淡くなつていき、だいたい全縣下に及んでいくことがわかる。

高橋獎博士によると<sup>3)</sup>オウニジウヤホシテントウの分布限界は年平均気温（午前10時観測）16°Cの線であるとし、また渡邊千尙博士は<sup>4)</sup>年平均気温は各地によつて変化が多いから、分布南限の指標として夏季平均気温（5～10月）を用いるべきであるとし、夏季平均気温21°Cの線が南限界であるといふ。

いま縣内の分布を

第1表 福井縣産オウニジウヤホシテントウの分布調査表

産地名		友永	森野	産地名		友永	森野	
新碓北細劔	保島	—	—	上下森岡五	文殊	—	—	
	瀧呂	—	●		保領	水島	—	●
	木岳	—	—		比谷	志比	○	—
東金長高大	十津	—	●	志南岡上王	中池	—	●	
	山室	—	—		池子	山本	—	—
	歟椋関	—	—		野山良	保	—	—
濱鷹大小	四囊	—	●	南北宅鹿	日柿	—	—	
	郎巢	○	●		蒜	宇津尾	○	○
	野山	○	●		堺	(津二)	○	○
乾下羽上下	側見	○	●	朝宮城越国	日崎	—	●	
	味見	○	●		崎	(朝江)	—	●
	庄	○	●		崎	(波浦)	—	●
上西上下石	庄	○	●	織系天敦粟	崎	—	●	
	穴	○	●		田生	(朝江)	—	●
	馬	○	●		賀	(大味)	—	●
阪五富平勝	庄	○	●	北小瓜熊	田生	—	●	
	穴	○	●		西耳	(織田)	—	●
	馬	○	●		濱生	(上糸)	—	●
村北野北	庄	○	●	松宮遠今	賀	—	●	
	穴	○	●		西耳	(津野)	—	●
	馬	○	●		濱生	(西津)	—	●

遅 福 上 一	井 市 宇 乘	羽 泉 坂 谷	—	●	口 高 青 八	名 田 浜	(和多田) (太田) 郷村	○	—	○	●
------------------	------------------	------------------	---	---	------------------	-------------	---------------------	---	---	---	---

備考：○● 棲息する — 発見しない 空白部 回答なし

終りにこの小文を報告するにあたり材料の提供をいたゞいた各位に厚く御禮申

これらの点から考察すると、高橋獎博士の説はおゝむね該當するようであるが、範囲が狭く気温変化が少いため断定はできない。渡邊千尙博士の夏季平均気温説は最高最低気温の平均を用いたか、10時観測の平均を用いたかはつきりしないが、10時観測の平均気温<sup>5)</sup>によつて調べると、21°C線は年平均気温16°C線以内にはいりかえつて一致しない。

これを要するに分布限界を論ずるには、自然分布の調査に併行して棲息可能温度の実験も必要とするのではなからうか。

し上げる。

文 献

- 1) この学名は湯淺啓温氏の熱河省昆虫類 VI 一鞘翅目 (I) てんとうむし科 (1936) の報文によつた。
- 2) 5) 福井縣管内気象統計資料 (1897~1937) .
- 3) 高橋獎：関東地方に於ける二十八星瓢虫 及大二十八星瓢虫の分布. 病虫害雜誌, 第12卷, 第10号, 第11号。
- 4) 渡邊千尙：オウニジウヤホシテントウの分布南限界の指標としての夏季平均気温. 日本昆虫学会第9回大会講演要旨 (1949) .

(福井縣立農事試験場)

### リンゴコブアブラムシ (*Myzus malisuctus* MATSUMURA) 防除に関する研究

関 谷 一 郎 ・ 吳 羽 好 三

リンゴコブアブラムシ *Myzus malisuctus* MATSUMURA はリンゴの梢端部の嫩葉に寄生して葉を縦に細く捲くので一名葉捲蚜虫とも稱して居る。

長野縣に於ては至る處に分布し、其の被害程度は苹果の品種によつて異り、デリシヤス、スターキング、ゴールドンデリシヤス、祝等は特に被害甚だしく、國光、紅玉、印度等に於ては稀に捲葉を見る程度である。近年硫酸=コチンの不足により被害多い品種を栽培して居る當業者は大害を受け、廢園の悲運に遭遇せる果樹園も尠くない。或は比較的被害少き品種との改植を余儀なくされた事実も見のがすことは出来ない。

卵態で冬期枝梢上に越冬し、翌年4月上、中旬頃孵化した蚜虫即ち幹母は仔虫を胎生し、其の仔虫は7~10日位で親になり、單性生殖で胎生する。

この様にして10月初頃まで10數世代胎生繁殖を繼續する。10月中旬頃に至れば有翅の雌雄を生じ、次の親は枝梢下の芽の附近に越冬卵を産下する。

有翅胎生雌虫の体長は1.5mm内外で、黑色長卵状である。頭部は黑色、複眼は黑色に近き濃綠色で顯著であり、3個の單眼は周縁赤色味を帯び黑色の觸角は6節よりなつて居る。

本虫は松村松年博士の命名で、西谷順一氏 (1927) の加害状況に関する報告、堀松次氏 (1937, 1940)、高橋獎氏 (1931)、進士織平氏 (1944) 等の研究報告がある。

防除法に就いては発芽前市販機械油乳劑20~25倍液に硫酸=コチンを加用し、發芽當時から2~3回硫酸=コチン液、ネオトン液、除虫菊石鹼液等を撒布する事に依り之が被害の予防驅除することの出來得るは既に中山昌之助氏 (1943) が、リ